

悔しさを糧に 光星10度目の夏

▽下▲

雪辱への思いを胸に、練習に明け暮れてきた光星ティーンは青森大会1回戦で、早速培った力を爆発させた。初回、近藤遼一、原瑞都の2者連続本塁打から始まり、五回までに6発22得点。大会記録にあと1本と迫る一発攻勢で観戦者をも圧倒した。この試合3発だった原は「1日5000回振り込んだおかげ」と、強化練習の成果を強調した。

2回戦も15得点で快勝し、3回戦の相手は宿敵青森山田。先発は春季県大会で煮え湯を飲まされた速球とスライダーに力のある投手だったが、打線は研究し尽くした成果を着実に発揮した。5番の大江拓輝は「相手は変化球でファーストストライクを取りにくる」と、三回にスライダーをはじき返して貴重な追加点につなげた。配球だけではない。打席の内側ぎりぎりに立ち、圧力を掛け続けることで、しっかり攻略した。

投手陣も成長ぶりを示した。大一番で先発したのは「春先は制球が安定せず、信頼を

産量打壘本 圧倒で打



青森大会決勝の初回、先制の3点本塁打を放つ、八字光星の近藤遼一。練習に裏打ちされた勝負強い打撃で、攻撃をけん引した＝23日、弘前はるか夢

「負けがあつたからこそ」

得ることができていなかった」という左腕横山夏風。夏に備え、制球力自慢の主戦後藤丈海の指南を受け、得意の変化球を学び直すなど、バージョンアップに取り組んだ。その成果で、初回こそ先頭打者弾を浴びたものの、尻上がりに調子を上げて1失点完投。「スライダーの握りを変えたら制球が安定し、カウントも稼げるようになった。後藤には感謝している」。チーム内では協力し合い、難敵を撃破した。

チームは準々決勝、準決勝も攻守で勝負強さを発揮。準決勝の青森商戦では、変則投手が相手だったが動じなかった。近藤は「直球でも変化球でも、甘く入ったら捉えるつもりでいた」と、先制を許した直後の五回に同点打。守っても、相手にリードを許すことはなかった。

弘学聖愛との決勝では、制球に苦む相手先発を早いカウントから打ちにかかり、初回表に8得点。鮮やかで強烈な先制パンチを浴びせた。チームはその差を守り切って戴冠した。

優勝後の取材に、大会6本塁打の近藤は「あの負けがあったからこそ、自分たちは強くなれた」と胸を張った。仲井宗基監督も「負けるのは悔しいが、意味のある敗戦があることも再確認できた」と語った。常勝が求められるチームが喫したセンバツと春の県大会の「2敗」は、ノーシードからの逆襲劇を完結させる確かな原動力となった。

(林泰輔)